

国際学会
人と町



INTERNATIONAL
PERIMETRIC
SOCIETY

XI VISUAL FIELD SYMPOSIUM

遺稿

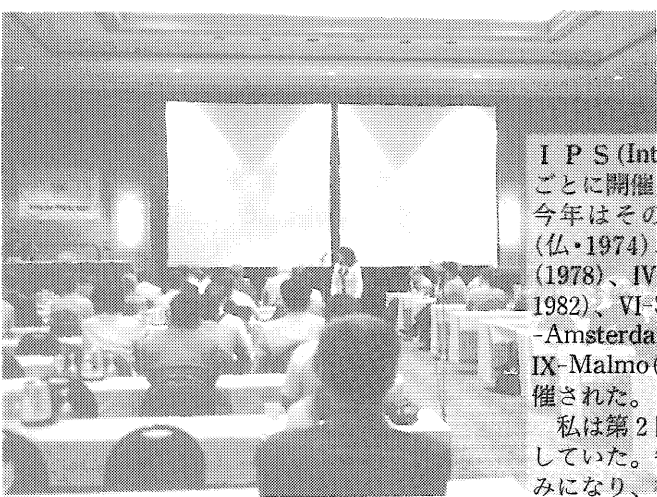
第11回国際視野研究会
家庭的な雰囲気若い世代も



WASHINGTON, D.C., U.S.A
SUNDAY, JULY 3 - THURSDAY, JULY 7, 1994

大阪市阿倍野区・湖崎眼科
院長 湖崎 弘

Handwritten signature: H. Kosaka

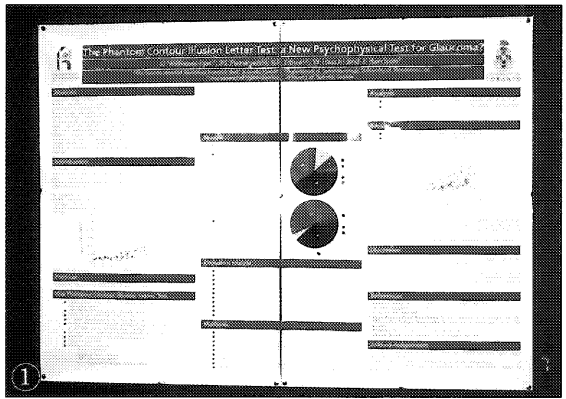


I P S (International Perimetric Society) は、2年ごとに開催される視野についての国際的研究会であり、今年はそのIXに当たる。これまでは I-Marseilles (仏・1974)、II-Tübingen (西独・1976)、III-東京 (1978)、IV-Bristol (英・1980)、V-Sacramento (米・1982)、VI-Santa Margherita Ligure (伊・1984)、VII-Amsterdam (蘭・1986)、VIII-Vancouver (加・1988)、IX-Malmö (スウェーデン・1990)、X-京都 (1992) で開催された。

私は第2回以来、毎回出席し、第7回まで演題を出していた。毎日、社交行事があってメンバーは顔なじみになり、極めて家庭的な研究会である。

恒例として学術展示が演題の半数を占め、器械展示もあり、そこで朝食やコーヒーもとる。学術展示はカラフルなものも多く、レイアウトも人目を引くものが多い。残念ながら日本の展示は「中身が大切」との考えからか、表現が淋しい。私もほとんど毎回演題を展示したが、外国のそれを見て、慌てて家内と一緒に文房具店を探して色紙を買い求め、会場で作り返したこともあった。外国に負けない色彩豊かな展示を次の若い世代に期待したい。

① 学術展示





右から河野吉喜先生(木沢記念病院)
山本哲也先生(岐阜大学講師)・北澤克明先生(岐阜大学教授)と筆者夫婦

② 日本の出席者

毎回出席者は二百人くらいで、日本はアメリカに次いで多い。常連の中では可児一孝教授(滋賀医科大学、溝上國義助教授(神戸大学)と私くらいで、松尾治亘、遠藤成美、古野史郎、北原健二、原沢佳代子(ORT)の諸先生の顔もなかった。今までよく出ておられたのは、ほかに岩田和雄、東郁郎、松崎浩の諸先生だが、ことに唯一の日本理事の大鳥利文教授(近畿大学)がおられなかったのは非常に淋しかったが、今回、北澤克明教授(岐阜大学)がIPSの副会長に選ばれたのは嬉しかった。北澤先生は国際緑内障学会の会長にもなった。共に重責の地位なので、われわれも応援したい。

③ アメリカ独立記念日

研究会第一日目の七月四日(月)はアメリカ独立記念日で、それに参加することを社交行事のメインとして、主催者は期日を決めたようである。会が六時に終わり、それからバスに分乗してキャピトル(連邦議会議事堂)に向かう。キャピトル前の広い芝生に何万人もの人が集まっている。まだ太陽が高く、暑い暑さの中、老

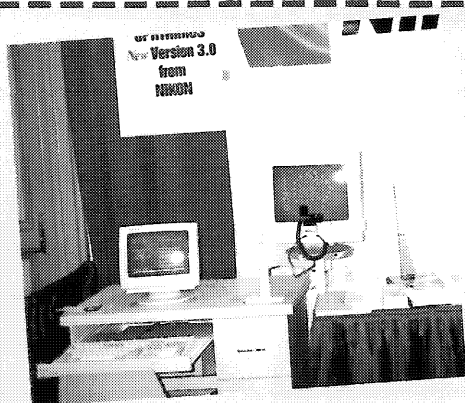
いも若きも敷物を広げ弁当を食べている。野外コンサートや花火大会が開かれる数時間も前から、人がぞくぞくと集まって来る。私は小学校の運動会に親たちが朝早くから席の確保に出たことを思い出した。私たちが夫婦は帰りの混雑を予想して一足早く帰り、花火はホテルのテレビで見た。

④ ワシントン国立大聖堂見物

第二日目の午前はフリータイムで、有料行事の国立大聖堂見物に参加した。国立大聖堂は壮大ではあるが、完成したのが数年前で、ヨーロッパの伝統ある大聖堂から見ればきい過ぎる。ただ、アメリカの必死に歴史を作り上げんとする努力がうかがえる。日本もせつかくの自国の歴史を大切にすべきである。

IPSは毎日社交行事があり、七月三日はウエルカムパーティー、四日は独立記念日のピクニック、五日は下院議員会館での晩餐会、六日はバンケットで恒例の各国歌合戦があり、すべて無料である。

さらに朝食も昼食も会場で食べられるので、簡単なが三食付いている。会費はメンバー四二五ドル、同伴者三二五ドルと、日本ではとても考えられない。しかもホテルも四割引きである。

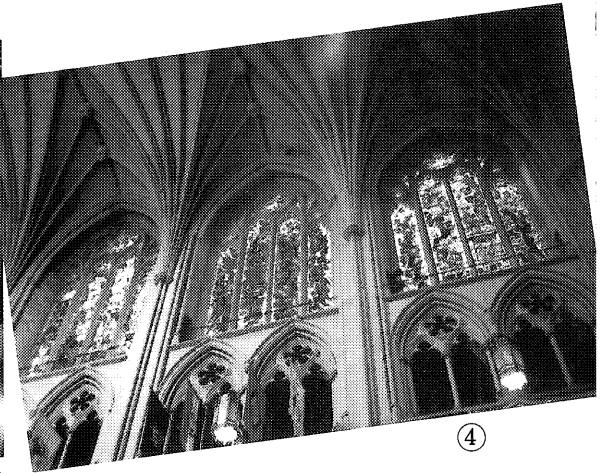


〈器械展示〉

器械展示は7社あり、その中に日本のニコン社が自社製の視野計を出していた。Ring Perimeter Ophthalmus と称し、Dr.Frisen(スウェーデン)が開発した30°を測る中心視野計で、視標は正式名を Highpass resolutionperimetry と言う二重のリングで、大小のものがテレビ画面に出て5分間で検査が終わる。リング視標に特別な意味があり、現在、世界各国で研究されており、今回の研究会でも多数の演題が出ている。ゴールドマン視野計、チュービンガー視野計、オクトパス、ハンフリーに次ぐ次代の視野計になるかもしれない。



山崎芳夫先生(日本大学)より写真提供



④

⑤ 各国歌合戦

最終日のパンケットでは、各国おのの歌を披露して歌合戦をするのが恒例となっている。そのため工夫を凝らして準備して来る。一番派手なのはイタリアの Zinzirian 教授によるもので、大抵はカセットテープ持参で、「This is my orchestra」と紹介する。

日本は松尾先生が一人で古式豊かな万葉集を歌われたが、途中から私が世話をして全員で歌うことになった。今回は面倒になって若い人に任せたが、近畿大学の岩垣厚志君と尾辻理君が音頭をとり、「上を向いて歩こう」と「幸せなら手をたたこう」を会場全員を引き込んで歌い、最後に岩垣君がエルピス・プレスリーの物まねをし、会場から大拍手が起った。もう私の出番ではなく、若い世代に移ったことを実感した。

⑥ 前田君とボス

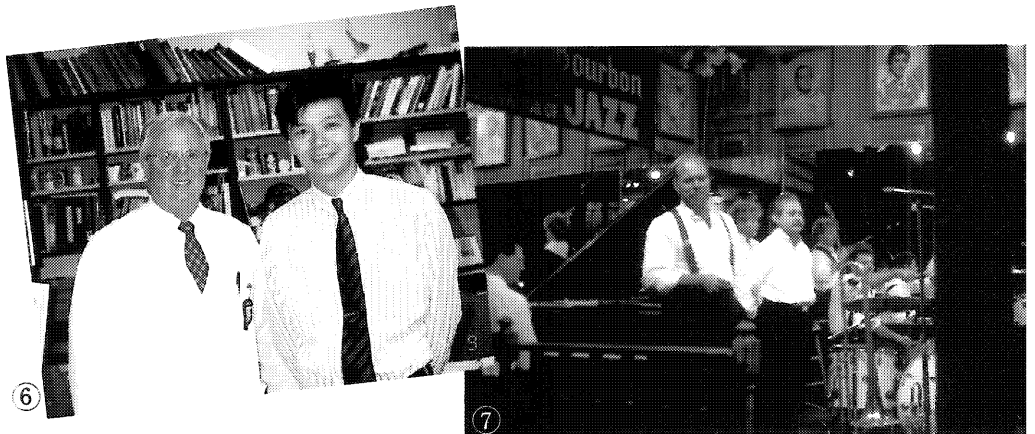
ワシントンDCでのIPSの後、懸案の娘夫婦を訪ねて、ニューオリンズまで足を伸ばした。私の家内の醇子は、娘・前田裕子の次女出産の手伝いに去年二月ニューオリンズまで一人旅をして、母は強しと感心させられた。

娘婿の前田直之君は二年前、大阪大学眼科からルイジアナ州立大学眼科に留学し、ビデオケラトスコープの自動診断の研究をしている。前田君のボスの Stephen D.Klyce は Ph.D.で、かつて三島濟一先生の研究助手をしていたことがあり、「三島先生こそ最高の学者である」と、非常に尊敬しているとのこと。当然のことながら、私の畏友が誉められるのは何より嬉しかった。Dr. Klyceの夫人 Dr.McDonaldは、私の主催の研修旅行で講演をしてもらったこともあり、世間は狭いと感じた。

⑦ ニューオリンズのフレンチクォーター

ミシシッピ河口にある古い街で一六九九年フランス人によって命名されたとのこと。最初はスペイン、次にフランス、再びスペイン、さらにフランスを経てアメリカの支配するところとなり、街のたたずまいも古い時代のそれが残っており、アメリカでも情緒あふれる街として今は観光地として生きている。

中でも下町のフレンチクォーターは観光の中心で、前田君に案内されて見物した。典型的な南部の街であるニューオリンズは、黒人音楽を基礎とした独特のデキシランドジャ



⑥

⑦

ズの発祥の地であり、私もそれを聞くことができた。驚いたのは警官の数が多いことで、前田君によると観光地には安全が何より大切で、そのため警備であるとのこと。日本に居てはわからないことである。

(一九九四年八月記)